
再会

シャーク・市屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
再会

【Nコード】
N1842I

【作者名】
シャーク・市屋

【あらすじ】
別れた彼女との再会。
その先に訪れる信じられない結末。

俺はパンドラの箱を開けた。2年前に別れた彼女に再会した。

夏も疾うに終わり、吹く風に涼しさを感じ始めた日曜日。

入社後直ぐに配属された田舎の小さな営業所から晴れて本社への栄転が決まった俺は翌月の引越に向けて部屋の掃除をしていた。この町に来て早5年。初めは殺風景だったこの部屋も気付けば一人暮らしとは思えない程の多くの物が溢れていた。まずは趣味の本を片付けようと、いらなくなつた本を整理していると棚の奥に落ちていた一枚の写真を見つけた。それは2年前に別れた彼女と最初のデートで撮つた写真だった。夕日で赤く染まつたキレイな海を背景に、はにかんだ笑顔で手を繋ぐ幸せな二人の姿がそこにはあつた。もう忘れたつもりだった。もう思い出すまいと胸の奥底に深く沈めたはずだった。でもその彼女の笑顔を見つめた瞬間、目頭がジンと熱くなり、長い間抑え付けていた想いが決壊したダムから溢れる水の如く一気に込上げて来た。逢いたい。不意にそう思つたものの、今更そんな事を口にするのは俺のエゴ。今ではきつと幸せを手に行っている彼女にとっては迷惑なだけ。そして何より今となつては連絡をとる術がない。だから俺はその想いを胸の痛みに耐えながら再びグツと飲み込み、写真はもう読むことのない本の間に閉じた。しかし、その日以来、別れた直後の様に毎日、彼女を思い出すようになった。二人で見た風景。交わした言葉達。彼女の少し癖のある笑い声。幾多もの思い出が浮かんでは瞼の裏で消えた。これ以上の思い出を掘り出すのが怖くて部屋の片付けは進まなくなつた。彼女の写真を見つけてから一週間後、遂には夢にまで見た。サヨナラを告げたあの日の悲しい瞳をした彼女ではなく俺の問い掛けに何でも「うん。」と柔らかな笑顔で答えてくれるお互いが必要としていた当時の彼女のままの夢だった。目を覚ました俺の枕元は涙で濡れていた。止め

処なく溢れ続けた想いはもう止める事が出来なかった。俺はベッドから起き上がり携帯を手に取ると一通のメールを送った。

送信完了の文字を確認してから液晶右上の時計に目をやるとまだ6時を少し周ったところだった。出勤時間までまだ少しあった。もう一度眠りに就こうと再びベッドに潜りこんでみたものの心の場所がはつきりと判るくらい胸がズキリと痛み眠れなかった。しばらくぼんやりと天井の一点を眺めていたが気分は最悪。四肢に重りを縛り付けられ海の奥底に沈んでいく様な感覚に襲われた。ただでさえ月曜日の仕事は憂鬱なのに夢に見た彼女の幻想がその気持ちに拍車をかけた。それでも仕事には行かなくてはならない。学生時代だったら2、3日部屋に籠り、塞ぎ込む事も出来るのだが今は小さいながらも責任がある。今日だって午前だけでもクライアントとのミーティングが2件ある。休むわけにはいかない。そう思えるだけ少し俺は大人になったのだらう。熱いシャワーでも浴びたら少しは気分が晴れるかもしれない。そう思った俺は鉛の様に重い体と心を引き釣りながらベッドから這出るとバスルームへと向かった。すると、

” You’ve got mail.” ベッドの上の携帯が鳴った。

タオルをベッドに放り投げ急いで携帯を手にとると先程メールを送った相手、さちこからだ。さちこは俺が5年前にこの街に来てから会社の後輩を通じて初めて出来た友人であり、当時、大学のクラスメイトだった彼女を俺に紹介してくれたキューピットでもある。普段はメールを送っても狩で忙しかったなどのふざけた理由で中々返信してこない彼女だが、今日に限っては早朝に送ったメールにも関わらず直ぐに返信をくれた。只ならぬ様子を察知したのだろうか。女の勘は鋭い。しかし、「かめはめ波でない。」返信内容が意味不明だった。一体夢の中で誰と戦っているのだろうか。彼女ならフリーザ最終形態が相手でも素手で勝ちそうだ。「千豆いる？」

そんなメールを作成していると再度さちこからのメールを受信した。「ごめん。寝ぼけてた。レミナはまだ結婚してないよ。会いたいんだ？今度の日曜日レミナの家に遊びに行くから伝えてみるよ。それでもし会えそうな雰囲気だったら直ぐ連絡するよ。」寝ぼけ過ぎだろ。そう思いつつも、2年以上経っても引きずる女々しい俺に伝えてくれるさちこの優しさに感謝した。それからの一週間、まだ会えると決まった訳でもないのに俺は完全に浮き立っていた。ジャンプの発売日待つ小学生のように週末を待ちわびた。お陰で仕事では凡ミスを繰り返し、いつも以上に上司に叱責された。それでも平気だった。レミナとまた会える。そんな淡い希望があったから。そして運命の日曜日はやって来た。

アパートの屋根を叩く雨音で俺は目を覚ました。半開きの目で直ぐに携帯をチェックした。時刻は10時過ぎ。受信メール5件。しかし、全部出会い系のスパムメール。連絡が来たら直ぐにでも会えるようにその日の予定は全てキャンセルしてメールを待った。気長に待とう。そう自分に言い聞かせたつもりだったが何かをただ待つ時間は無限に感じた。瞬間に過ぎていく日常が嘘のようだった。テレビを見ても、パソコンに向かってても一向に落ち着かなかった。普段は吸わないタバコも起きてから数時間で一箱無くなった。いつまでも鳴らない携帯。時計の短針が30度振れる度に淡い期待は落胆へと色褪せて行き無限に感じた時間も確実に過ぎていった。結局、日が沈んでもからのメールはなかった。外を見ると雨は激しさを増していた。

当然だと思った。お互いの幸せを祈って2人新たな道を歩き始めた様な綺麗な「サヨナラ」じゃなかったから、2年も経ってまた会おう。そんな気持ちになれないのも当然だと思った。判っていたはずだけど、やっぱり胸が痛む。そろそろ俺も前を向いて歩かなきゃいけない時かもしれない。そんな事を考えながら深い溜息を吐くと、

「You've got mail!」 右手に握りしめていた携帯が鳴った。サブディスプレイにはさちこの名前。一気に鼓動が加速した。慌て過ぎて落としそうになりながら携帯を開く。すると短い文章が一つ。「レミナ今から直接電話するって。」「予想外だった。俺は余りにも突然な展開に動揺した。でもどんな理由であれ 2年間どれだけ聞きたいと思っても夢のなかでしか聞けなかった彼女の声が聞ける。そう思っただけで心躍った。やがて見知らぬ携帯番号からの着信があった。「もしもし。」「そう携帯の向うから聞こえたのは紛れもなくレミナの声だった。2年経っても何ら変わることはない、俺の大好きな甘い声が耳を擦った。ただそれだけなのに空っぽの胸の中が何か温かい物で満たされていくのを感じた。「元気?あの時はいろいろ酷い事言っただけゴメンネ。」「俺のほうこそゴメン……。」「暫くきこかないながらも温かい会話が続いた。しかし、幸せな時間は長く続かなかった。言葉を交わす度、胸の中の温かい何かは熱を失っていった。なぜなら、彼女の話す言葉、声の雰囲気。それらから察すると2年間思い続けた俺の気持ちを知った上で最後のさよならを言っている感じだったから。でももしこのまま切ってしまったら二人の歩む道は決して交わる事はない。俺は確信した。だから、「今どこにいる?少し会えない?」「決死の覚悟でそう言った。すると戸惑いながらも彼女は「うん。」と小さく言ってくれた。彼女には俺と別れた直後からずっと付き合っている彼氏がいることはさちこから聞いて知っている。だから例え、何度自分の想いを伝えても彼女の答えは変わらないだろう。でも、もう一度、最後にもう一度だけこの想いを伝えよう。そう心に決めると、待ち合わせの場所を選んだ自宅近くの駅へと車を走らせた。

彼女との再会。それはパンドラの箱を開けるようなものだった。一度開けてしまえば2年前と同じ、もしくはそれ以上の痛みや苦しみ止め処なく溢れ出すかもしれない。平坦だけど平穏だった日常に影を落とすだけかもしれない。それでも俺は開けた。もう一度彼

女に会いたい。ただそれだけの理由で。

日曜日の夜の駅は静かだった。傘を叩く雨音と水しぶきを上げ濡れたアスファルトを走っていく車の音だけが響いていた。降りしきる秋雨のせいか襟元をすり抜ける風は冷たくジャケットも羽織らず家を飛び出した事を少し悔いた。別に駅の何処でと待ち合わせ場所を決めた訳ではないけど、俺は自然と歩を進めた。改札をすり抜ける行楽帰りの家族連れと日曜出勤のサラリーマン。やっぱりその向こうに彼女の姿を見つけた。改札近くの公衆電話の横に立つ彼女。それはかつて当たり前前の様にあつた風景。ギュッと胸が締め付けられる感情に襲われながら彼女の元へ駆け寄った。「久しぶり。元気だった？」そう言いたかつたけれど、極度の緊張のせいで噛み過ぎて何を言っているのか判らなくなってしまった。そんな俺を見て彼女は小さく笑った。彼女の笑顔は少し大人びたけど俺の大好きな笑顔のままだった。「ここで立ち話しても寒いだけだし、お茶しに行こうか？」今度ははつきり言うつと彼女は頷いた。駅近くのカフェに入るときこちなかつた二人の会話も、次第に弾み始めた。別れた当時のこと、今の仕事のこと、そして自分が思っていること等いろいろ話した。彼女の瞳にはいつの間にか涙があふれていた。涙の意味など判らなかつたけど相変わらず泣き虫な彼女を見つけられて嬉しかった。長い間ぎすぎす尖っていた心のカドが丸くなって行くのを感じた。それと同時にまた胸の奥に温かい灯が点り指の先が甘くしびれるなんとも言えない幸福感に包まれた。彼女は今俺のものではない。そしてそれはこれからも変わることはないかもしれない。だけど、思い続けた彼女が今こうして俺の目の前に座り話している。二度と見る事の出来ないと思っていた彼女の姿がそこにある。ただそれだけで幸せだった。2杯目のコーヒーを飲み干したとき「もうそろそろ行こうか。」彼女が切り出した。ホントはずつと終電が行ってしまうくらいまで話していたかつけれど、無理強いは出来ない。後ろ髪を引かれる思いで店をあとにした。店を出ると雨

は土砂降りになっていた。二人のデートの時は雨が多かつたな。そんなことも思い出した。彼女に家まで車で送るよ。と言った。でも彼女は電車で帰るからいいと言った。少しでも長く彼女といたいと思う俺は送ると言い張った。彼女も電車で帰れるから大丈夫と言いつ張った。ちよつと言いつ合いになった。昔もこんな些細なことでもケンカしたね。そう言うのと二人で笑った。結局彼女が折れて家まで送る事になった。いつも俺の我侷を聞いてくれた彼女。そんな彼女の優しさにまた甘えた。代わりに俺は何をしてあげたのだろうか。振り返ってみてもはつきりと思いつせる事は何も無い。与えられた十分過ぎる優しさに慢心し、思いつやる気持ちをおざなりにした。注がれる愛情を不変だと勝手に思いつ込んでいた。側にいることが当たり前だと思いつていた。だから彼女の抱えつた胸の痛みに気付く事はなかつた。全てが指の間から零れ落ちるその時まで……。俺は車を止めたロータリーへ向かう途中、彼女と肩を並べて歩ける喜びと、過去の自分の情けなさを交互に噛み締めた。

彼女は電話、カフェ、そして車中でも「あの時はゴメン。出会えて良かった。だけどこれから二人の関係は変わる事はないよ。」と何度も繰り返した。俺は「分かつてるよ。ただ気持ち伝えたかつただけだから。」作り笑いでそう言うのが精一杯だった。結局、試合は始まることなく終りを知らせる笛だけが何度も鳴り響いた。そんな感じだった。彼女と一緒にいるだけで感じた幸福感も終焉をリアルに感じた途端弾けて消えた。でも最後にもう一度、あともう一度だけ伝えよう。俺は4年半前に彼女に告白した時、下手なクソなギターを片手に歌つたラブソングをカーオーディオから流した。「やめて……。」彼女は一瞬で涙声になるとCDを止めようと手を伸ばした。俺はその手をギュツと握り締めながら言った。「最初にレミナに告白した時から今までずっと、ずっと変わらず好きだ。もしまた付き合えるのなら悲しい思い、寂しい思いは絶対させない。だからもう一度付き合つて欲しい。」俺の言葉を最後まで待たず彼女

は泣きじゃくり、嗚咽だけが彼女の口から漏れた。流れるラブソング、泣く彼女。4年半前と同じ光景。でも涙の意味は違う。俺は最後の審判が下るのを待った。10分くらい経っただろうか。落ち着きを取り戻した彼女が漸く口を開いた。全身に緊張が走る。「ごっごめんね。泣いてばかりで……。今更こんな事言っておかしいかもしれないけど、会いたいわって言うてるってさっちゃんから聞かされたときからホントはね。自分の気持が判らなくなってきた……。」「驚いた事に今までと全く違う反応を見せ始めた。俺は逸る気持ちを抑えつつ「そっか。判らないなら俺はその答えがでるまでゆくり待つよ。今まで2年待ったから次のワールドカップくらいまで待ったって全然平気だし。」「精一杯強がった。」「待ってて貰っても気持に応えられないかもしれないよ。」「絶対大丈夫。俺は二人の運命を信じる。」「そんな風にして辛くない?」「辛くないよ。大切に思える人がいる。ただそれだけで幸せだから。」「折れそうな心を必死に抑えて笑顔で言った。「ありがとう。」「彼女はまた涙で顔をくちやくちやにしながらそう言った。彼女を家まで送り届けると、固く握手を交わして別れた。「さよなら。」「じゃなくて「またね。」「と言って。

帰りの車中。一人泣いた。信号が涙で滲むくらいボロボロ泣いた。人目を憚る事無く声を上げて思い切り泣いた。それは思い出の彼女に会えた喜び故か、さっきまで助手席に隣に居た彼女がまた一つの思い出に変わってしまった悲しみ故か、はつきりとは判らなかつたが、止め処なく涙は溢れ続けた。一体、これからどんな運命が待ち受けているのだろうか。二人の恋の終末は神のみぞ知るのであるのか。でも昨日までは存在すらしなかつた運命の扉を今日自らの手で少しだけ開いた。そんな気がした。そんな事を考えていると携帯が鳴った。もしかしてレミナ!?慌てて手に取る。「もしもし?」「聞こえたのは今一番聞きたくない声。」「もしもし。今どこ?」「そして悪魔の様に冷たい声。」「こっコンビニかな。」「ふーん。」「明らか

に疑っている様子だ。「まあどこでもいいけど、何で今週帰ってこなかったの？来週はツトムの幼稚園の運動会だから絶対帰ってきてよ。」「・・・はい。」返事をする前に電話は切れた。無駄に勘の鋭い嫁がいると落ち着いて不倫も出来ない。

5年続いた単身赴任生活も後一週間で終わり。来月からは地獄の始まりだ。だからなんとか、今日は無理でも来週末にはレミナと一発・・・と考えてたのに。残念。代わりに「今から会える？」セックスフレンドのちえにメールした。

(後書き)

最後まで真剣に読まれた方。
申し訳ありませんでしたw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1842i/>

再会

2010年12月8日02時20分発行